



自然・ひと・体験

編集：日本野外教育学会広報委員会

発行：日本野外教育学会事務局

〒305-8574 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学体育系野外運動研究室

TEL&FAX. 029-853-6339 MAIL. office@joes. gr. jp



「ねえ、後ろみてー！すごいよーっ！！」「こんなところまで登ってきたんだー」（岩手県姫神山山頂直下）

特集 幼児 × 野外教育

巻頭言 便利の益、不便の益 近藤 剛	2
特集「幼児×野外教育」	3～7
2020年度日本野外教育学会オンライン研究大会 速報	8
第3回日本野外教育学会研究集会 開催のご案内	9
事務局便り	10～11

便利の益、不便の益

近藤 剛（鳥取短期大学）

人工知能（AI）をはじめ、IoTが躍進する現代社会は「より便利に、より合理的に」が今後の発展に向けた合言葉のようです。ごく身近なところでも、ロボット掃除機、自動運転技術、ドアを開ければ照明が付きふたが開き、自動で水が流れるトイレ、手をかざせば石鹸や水が自動で出て、洗い終わると勝手に止まる洗面所。ちょっと前にはなかった便利さが次から次へと産み出され、省力化、合理化を旗印に、我々の生活の在り方を変えていきます。

「便利」という行為は、それまでは数多くの思考や工程が必要だったことを単純化したモノと考えられますが、その中には「成長、充実、技術、楽しみ」といった人の育ちや生活の質を支える要素が含まれてはいたはず。言い換えれば、「便利」を目指すことで、これらの要素をそぎ落としてしまっている時もあるともいえ、一旦、立ち止まって考え直す時が来ていると感じます。さらに、「便利」という感覚は、「不便」を知るモノにしか感じることでできない状況です。家庭では掃除機が活躍するが故、室内ボウキを使った量の掃き方を知らない、と実習先で平気で口答える学生がいる時代です。こんな生活が当たり前の今の子どもたちには、「便利」という感覚が生まれるのでしょうか？ 仕方がないのかもしれないませんが、本当にこれでいいのかと心配になります。

最近、「不便益」という言葉を耳にするようになりました。「不便益」という学問を提唱している川上浩司氏（京都大学）は、「便利の追及で見過ごされてきたコト」に着目して、「不便で良かったこと」、「不便がもたらす効用（benefit of inconvenience）」を考えることだと

いわれます。例えば、「素数（1、2、3、5、7、11、13、17）にしか目盛のないものさし」（長さを測る度に頭が鍛えられるという益）、「目的階のボタンを押すと、1つ下の階に止まるエレベータ」（運動不足解消という益）など、手間はかかりますが、無駄ではないことを産み出すという興味深い取り組みです。この考え方は、野外教育とも相通じるものがあるのではないのでしょうか。主に自然環境の中で生まれ、「便利」の対極にある「不便」を教材として提供し、日常生活で「便利」という名のもとにそぎ落としてしまってきた要素に気づかせ、子どもたちの育ちの支援をする活動ですから。アプローチの仕方は異なりますが、不便の益を大切にするココロは同じようです。

AIという「究極の便利」が人々の仕事を奪うというショッキングな報告は記憶に新しいところです。仙台大学で開催された昨年の学会大会の際、「AI社会における野外教育」という、来るべきAI時代にあって野外教育が果たす役割を考えようという分科会に参加しました。当初は野外教育と相反する位置に存在すると思われたAIでしたが、「野外教育はAIを否定することなく、必要な場面を見出し、活用するモノとして認識していくことも大切」というまとめがなされています。

瀬戸内寂聴さんの「今の生活は便利になったけれど、そのために大切なもの、心を失ったようだ。物があっても使う人の心が通わなければ、物が生きていけない」という言葉を思い出しました。不便の益も忘れることなく、AIに代表される「便利」を上手に使いこなす能力（リテラシー）を忘れないでいたいものです。



特集「幼児×野外教育」

今号では、幼児を対象とした野外教育について、様々な立場の方から原稿を寄せてもらいました。野外保育の実践現場や指導者養成、研究者の視点から、幼児と野外教育の接点を考えるきっかけになれば幸いです。

保育の中での野外教育

豊留 雄二（自然遊びクラブ）

幼児を対象とした野外教育の実践者には、2つのパターンがあるように思います。一つは、幼児教育・保育を専門とする方が、野外教育活動に取り組む場合です。日本でも増えつつある、通年型の「森のようちえん」には、このパターンが多いように思います。もう一つは、野外教育の指導者が、幼児を対象に活動する場合で、私も後者の部類です。

そんな私が、「お散歩担当」の期間契約職員として保育園に勤務していたのは、2009年～2012年までの3年間です。盛岡市北部にあるこの保育園の周辺環境は、近年になってショッピングセンターや住宅地が整備されてきましたが、まだまだ豊かな自然が残っている農村地帯です。周囲の自然を活かして、「思いっきり 自然の中で お腹がすくまで遊ぶ」を園目標に、園庭での外遊びや園外保育が盛んに行われている保育園でした。

私が主に関わった、3才児以上のクラスでは、午前中の2～3時間くらいが中心活動の時間です。この時間に、クラスごと、あるいは複数クラスで一緒に、園庭で遊んだり、園外へお散歩に出かけたりしていました。保育園の向かいには、整備された湿地にカキツバタが咲く緑地公園があります。その奥には小さな山があり、ニュータウンが見渡せる展望所や、境内の下にアリジゴクが巣を作る神社があります。この2箇所がよく行く遊び場でした。保育園から3km離れた場所にあ

るリンゴ園は、秋の親子リンゴ狩り遠足で行く場所です。子どもたちは、リンゴの花が咲く春から何回も通って、リンゴの成長を確認しながら、往復のお散歩を楽しんでいました。

こうした園外活動の時間は、四季折々の自然の面白さや不思議さ、怖さに触れる良い機会ですが、なかなかその素材に気づかない先生もいます。そこで私は、一緒に遊んだりお散歩をしたりしながら、自然の変化や面白いものを見つけて、先生や子どもたちに伝えるようにしていました。タラノメやコゴミなどの山菜を見つけて収穫したり、クリのイガイガは、茶色になる前の緑色の時は硬くないのに触って確かめたり、ある時にはヘビがカエルを飲み込もうとしているのを発見したこともありました。

普段から遊んでいる場所の何気ない自然の事象を取り上げて、先生や子どもたちに目を向けてもらえるように促すことで、子どもたちが地域の自然と繋がれるように心がけていました。

また、身近な自然を使って遊びを展開することもありました。よく遊んだのは笹舟です。緑地公園の湿地には、水路から水が流れてくるので、笹舟を浮かべて遊ぶのにピッタリです。最初は「僕（私）にも作って！」と来る子どもたちに、私が笹舟を作ってあげますが、折りを見て「一緒に作ってみようよ」と何人かに作り方を教えます。上手に作れるようになったら、後はその子どもたちが他の子に作り方を教えてくれるようになります。

冬になったら雪遊びです。そり滑りや雪だるま作り以外の遊びとして、雪のテーブルとイスをよく作りました。出来上がったテーブルとイスは、休憩場所になったり、ママゴトの会場となったりしていました。私の作った物を見て、もっと大きな『王様のイス』を作ろうと頑張っている子もいました。

こうした普段の保育以外の活動として、年長児のお泊まり保育がありました。私が関わりはじめて以降、年長児のお泊まり保育をキャンプ形式で実施するようになったのです。

キャンプ形式によるお泊まり保育の1年目は、「困難な体験をさせたい」という園からの要望で、国立岩手山青少年交流の家を会場に、1日目は野外ゲームやクラフト製作を行い、2



日目に姫神山登山を行うプログラムを提案・実施しました。登山では、山頂からの雄大な景色を見た子どもたちが「すごい！」と興奮していましたし、全員が無事に歩ききったことで満足感も感じているようでした。

このキャンプ形式でのお泊まり保育と姫神山の登山は、その年によって変化するねらいに併せて、内容や運営方法を変更しながら、現在でも継続して実施されています。

こうした活動を通して、先生からは「大きなケガが減った」「体力がついた」「子ども自らチャレンジし、危険を予測できるようになった」「職員が介入しなくても遊べるようになった」というような子どもの変化があったことがあげられました。

この他にもいくつかの園でこのような活動を提供してきましたが、どの園でも、「子どもたちに自然体験をさせたい」という思いがありました。一方で、活動の仕方や、リスクを含めた自然についての知識が不足していると先生自身が感じているところも多いようです。そのため、自信を持って活動を展開できないでいることもあるようです。

野外教育の専門家である学会員の皆様が、保育園や幼稚園と繋がりを持ち、年に数回でも活動していくことは、幼児期からの自然体験活動をより活性化するために有効な手段ではないかと思います。

真剣に遊ぶ子どもたちから学んだこと

森田 彩虹 (沼津市立へだっこセンター)

乳幼児期の子どもたちは真剣に考えて遊びを展開しています。私が公立保育所に勤務していた時、2歳になる前の女の子が人形と負い紐を持って私のもとにやってきました。私はその人形を彼女におんぶさせると、彼女は次にままごと用のエプロンを持ってきました。私が彼女にエプロンを着せると、彼女は顔を真っ赤にして「ちあう！あかちゃん、ねんね！」と言って泣きながら怒りました。そこで私はハッとしてエプロンを外し、彼女に謝りながら彼女がおんぶしている人形にエプロンを掛けるようにしてお腹で紐を結びました。すると、彼女は満足したのか、再び友達が遊んでいるコーナーに戻っていくのです。彼女は、保育士の姿をよく覚えていて、それを遊びに取り入れていたのです。赤ちゃんが午睡する際に、保育士が赤ちゃんをおんぶし、ねんねこを掛けています。彼女はその様子を真似て遊んでいたのです。私は彼女が人形を真剣に寝かしつけようと必死に遊ぶ姿に、生活の中から学んだことを、そこにある物を使ってどうやって遊ぶか真剣に考え、遊びに取り入れている様子に驚きと感動を覚ええました。

乳児から幼児へと成長すると、想像力、好奇心、冒険心が増し、子ども同士でのコミュニケーションも生まれ、様々な遊びが展開していきます。そのような子どもたちと自然の中に行くと、木登りを

してジャンプを繰り返したり、一心不乱に穴を深く掘ったりして、時間が経つのを忘れて遊びます。また、草花をアクセサリーや、ままごと遊びの食材・食器にしたり、枝を使って絵を描いたり、枹にして音を出したり、剣にして大人には見えない敵と戦ったりするなど、自然の中での子どもたちの遊びは変幻自在です。

私は1年間、ドイツの様々な幼児教育の現場で研修をさせ

ていただいた経験があります。森の幼稚園に限らず、幼稚園、保育園、小規模保育等様々な保育現場を訪問しました。森の幼稚園はもちろん毎日自然の中で遊んでいます。園舎のある幼稚園等も午前中は毎日のように近くの森に出掛けていました。保育者それぞれが信念を持って子どもたちと関わっていましたが、多くの保育者は、子どもが自分で何をするか考えて人と関わり合いながら遊ぶことを大事にしていました。また、子どもが自然の中で遊ぶことは、閉鎖された室内より開放的で、リラックスできる上に、遊びを考える力、体を使う力等を育むことができるので、積極的に森の中に遊びに行く時間を作っていると話していました。私は研修先のある森の幼稚園で、面白い遊びをする子どもたちに出会いました。その幼稚園では朝の会で、森に行くか川に行くか相談して



決めます。川に行くと年長の男の子たちは決まって穴を掘り、水が湧くのを楽しみます。その水を川に合流させるために小川を作ります。干潮時しかそこで遊ぶことはできないので、次の日には跡形もなく彼らの作った小川は消えているのですが、川に遊びに行く度に1時間半以上その遊びをしていました。彼らにどうして同じことを繰り返しているのか尋ねると、「土を掘ると水が出てくるんだよ！その水を川に返してあげているんだ！」と使命感に燃えていました。楽しんでいただけかと思っ質問しましたが、彼らなりの考えや目的があり、それをも遊びにになってしまう彼らに脱帽してしまいました。森に遊びに行った日には、多くの子どもたちが誰からともなく、石や枝で倒木から木くずを削りそれを山盛りにしていました。何日も繰り返し削っていたのですが、ある日、チーズ屋さんが開店しました。木くずをチーズに見立て、さらに、色の違いや木くずの大きさの違いで山を分け、様々な種類のチーズが売られていました。そのチーズを買ってピザ屋さんを始める子もいれば、同じように木くずを削ってオートミール屋や

ジャム屋を始める子もいました。ちなみに、日本では、同じように木を削って「ふりかけご飯」で遊びが展開している姿を見たことがあります。木を削るという同じ遊びをしても、経験してきた普段の生活を取り入れることで、異なる遊び方を生み出す子どもの想像力の豊かさは万国共通であると思いました。

子どもたちは、どのような環境であろうと遊ぶことや挑戦することを忘れません。そして、子どもたちは生活を遊びに、遊びを生活に生かし、たくさんの挑戦を繰り返しながら、自ら育つ力と、仲間と共に育ち合う力を持っています。私は幼児期の子どもたちの育つ力が、自然の中での遊びで発揮される場面を多く見てきました。幼児教育も野外教育も綿密に計画し、設定や仕掛けを用意するプログラムもあります。しかし、保育者は幼児期の子どもが持つ成長しようとする力を信じて、自然の中で腰を据えて見守る時間を持つことがとても大切であると思います。

子どもたちが教えてくれること

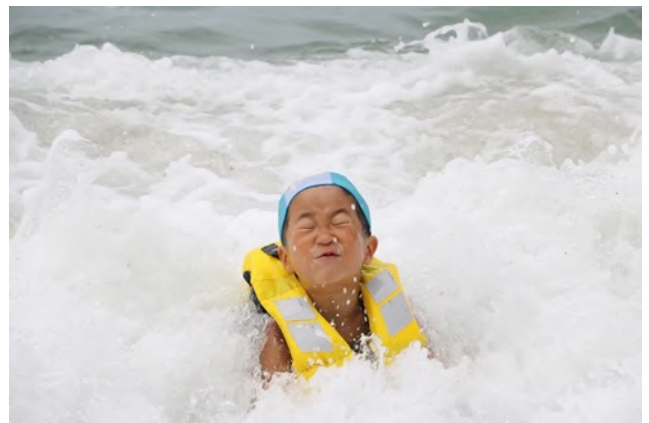
齋藤 雄 (国立曾爾青少年自然の家)

川で泳いだり、近くの沢でサワガニをつかまえたり、雪が降ると家の横の坂でそり滑りをしたり、私が幼稚園児だった頃に過ごしていた静岡県の山間地の身近な自然の中でたくさん遊んだことを今でも覚えています。子どもの頃、自然の中で遊んだ経験が、「自然っていいなあ」「自然の中で遊ぶことは楽しいなあ」という気持ちを抱かせるような原体験になっていると思います。この原体験は、子どもたちにもっと自然の中で遊んでもらいたいという思いを持って仕事をしている今に間違いなくつながっていますので、「幼児期はその後の人生に大きな影響を与える」ということを改めて実感します。

私には、子どもが3人います。3人とも男の子で、一番下の子がもう小学2年生になりました。今では、幼稚園や保育園に送り迎えをしていた頃が懐かしく思えます。私の異動のため、家族で福岡、横浜、福井と引っ越しをしました。引っ越した先々で様々な幼児教育と出会うことができました。福岡での一時預かりからはじまり、横浜では1学年6クラスもある大規模な幼稚園と都会の公園をフィールドにした森のようちえんにお世話になりました。そして福井では、遊具のない園庭で子どもたちが工夫して遊び、地域の自然の中に積極的に出かけていく公立保育園に通っていました。どの園でも子どもたちはとてもよい経験をさせていただき、私自身も幼児教育の多様さを知ることができました。私は幼稚園児だった

我が子から自然の中での遊び場、食べられる木の実がある場所、素手でどじょうを捕まえる方法など地域の自然について様々なことを教えてもらいました。幼児期はそこに関わる大人にも影響を与えてくれます。

今年の3月まで勤務していた国立若狭湾青少年自然の家では、国立施設の中で、最も海に近い立地を生かし、海はもちろんのこと、若狭地域の豊かな自然の中で幼児期の子どもたちに思いっきり遊ぶ機会を提供したいと小浜市、若狭町、高浜町の3市町と連携した「わかさわん しぜんはともだち」という事業を行っています。私の子どもたちもこの機会に海や山で遊ばせてもらいました。その事業で実施した調査研究について紹介させていただきます。



一つ目は、小浜市の年長児の保護者 220 名を対象とした自然体験に関する実態調査についてです。国立青少年教育振興機構が実施している「青少年の体験活動に関する実態調査」を参考に、小浜市や各園の協力を得て、年長児や保護者の自然体験の実態や自然に対するイメージなどを尋ねました。海水浴場もたくさんあり、泳げる川もある地域なのですが、「海や川で泳いだこと」という質問に「ほとんどない」と答えた割合は、年長児で 5.9%、保護者で 2.7% ありました。また、保護者の自然体験が多いほど、その子も自然体験が多い傾向が見られました。そう考えてみると、特に自然体験の機会がそれほど多くない保護者の子どもたちは、おそらく今後も海や川で泳ぐ体験をすることが難しいのではないのでしょうか。

「わかさわん うみはともだち」は、市内の全園の年長児を対象にしています。生まれて初めて海に入った子が「また行きたい！」と笑顔で言ってくれたことを先生から聞きました。たった一回の海で遊ぶ体験ではありますが、子どもたち全員が体験できる機会があること、これには大きな価値があるのではないかと信じています。こうした事業がどんな影響を与えているのか、前回調査から 5 年目の次年度に、同様の調査を実施し、経年変化を見てみたいと考えています。

二つ目の調査は、「わかさわん しぜんはともだち」に参加した子どもたちに、海での体験の前後で絵を描いてもらい、その変容から体験を通して感じたことが読み取ることができ

ないかというものです。事前に海に対するイメージを膨らませて来てもらい、事後に楽しかった思い出を残してもらいたいと思っていますので、調査らしい調査ではなく、各園で先生や友だちと話しながら自由に絵を描いてもらっています。体験する前の絵は、陸地から見た海の景色や水族館や絵本であるような水中の絵が多く、人があまり描かれていません。体験した後の絵は、自分自身が体験したことや見たものが具体的に表現されており、そして描き方が力強くなっているように見えます。体験する中で海から受けた刺激、感じたこと、見たことなど、諸器官を働かせたことで、こうした変化が現れたのではないのでしょうか。体験を通して子どもたちが受け取った自然や海からのメッセージを私たちに教えてくれるように思えます。毎年 200 名を超える子どもたちが絵を描いてくれますので、これからも時間をかけながら見ていきたいと思っています。

子どもたちが様々な体験を積み重ねていくように、私たちが地域の実態を把握したり、体験を通して伝わったことを読み取ろうとしたり、調査研究の視点を持ち続けながら、実践を積み重ね、子どもたちが教えてくれることをしっかりと受け止めていくことがよりよい体験の提供につながると思います。野外教育学会はこうした思いを持ち続けていくために大変貴重な場です。これからもぜひ関わらせていただきたいと思っています。

地域の自然を活かした保育実践と保育者養成校の取り組み

柴田 卓 (郡山女子大学短期大学部)

東日本大震災からもうすぐ 10 年が経過しようとしています。震災直後の福島県では、周知の通り外遊びが制限され、自然は触れてはいけないものとして扱われました。その影響から、福島の豊かな自然を活かした保育の営みは、震災を機に途切れてしまったように思います。ここ数年は、外遊びや屋外活動が震災前と変わらない状況に戻りつつある地域も多くなりました。しかし、福島県内の保育施設を対象に実施した質問紙調査(柴田, 2019)では、自然豊かな場所での保育活動の頻度で「年 1 回程度」と回答した保育施設は、県全体で 40% と想像以上に高い値でした。加えて、自然豊かな場所での保育活動を実施する際にサポートとして最も有効なものは「場所情報の提供」でした。このことから、福島県の保育実践においては、保育に活かせる地域の自然環境を見直すことや、自然保育の普及が喫緊の課題であると考えています。こうした福島県の現状をどのように捉え、取り組むべきかについては、自然保育が一般化されているデンマークやフィン

ランドの先進的な事例を調査しながら研究を進めています。

また、現在の保育者養成校に在籍する学生は、震災当時小学 3 年生前後であり、この先数年間は冒頭で触れたように、自然に触れずに幼少期を過ごした学生が養成校に入学してきます。このことを踏まえ、自然の魅力や面白さを実感できる授業を展開するべく模索しています。

その一環として、地域と連携しながら自然を活かした保育活動を実施している事例を次に紹介します。福島県小野町との連携では、年 7 回の頻度で地元のランドスケープを活用した「おのまちわかばたんけんたい」を実施しています。この活動は、小野町の名所である高柴山(写真 1)や夏井川、東堂山満福寺や諏訪神社をフィールドに保育活動を行っています。三春町との連携では、年 4 回の頻度で三春町の自然環境を活用した「なかさとちびっこたんけんたい」を実施し、さくら湖周辺の自然公園(写真 2.3.4)で保育活動を実施しています。福島県の異世代交流事業では、県民の森フォレストパー

クあだたらを会場に、3回のフィールドワークを実施し、4回目に学生実行委員会主催の親子自然遊びイベントを実施しています。

いずれの事業も卒業研究の一環として授業化し、地域の自然資源である森・山・川・湖・神社仏閣等を活用した保育デザインの方法について、実践的に学ぶことを目的としています。これらの取り組みで特に重要なことは、自然環境の中で学生が実際に幼児と触れ合う点にあります。幼児が遊びの中から様々なことを学んでいる様子を目の当たりにする点が重要と考えています。大学の講義室でセンス・オブ・ワンダーの大切さについて写真を見せて説明するより、目の前の子ども達の心が動く瞬間に立ち会えることの方が格段に深い気づきと学びに繋がります。

活動後の振り返りにおいても、実習を通して捉えた子どもの姿と自然の中で活動する子どもの姿の違いに気づく学生が多いと実感しています。同時に、学生たちは子ども達が自然の中で何に興味関心を抱き、どのように遊ぶのかを観察しながら、子ども達から自然の面白さや魅力を学んでいるように

思います。こうしたフィールドワークでの学びは「私たちの研究日記」と題し、学生たちが主体的に本学のブログで情報を発信するようになりました。また、今年の卒業研究テーマは「地域の特徴と季節を踏まえた自然遊びの探求」と「保育に活かせる地域のランドスケープマップ作り」に決まり、そのうち後者のグループは学会大会での口頭発表に挑戦するなど、精力的に研究を進めています。

最後に、地域の自然資源を見直し、その優れた環境を保育や教育で活かすことは、これから保育者を目指す学生や現場の保育者に加え、子育て世代の住民にとっても地域の魅力を再認識することに繋がる可能性があります。このことは、地方の保育者不足が深刻な問題として挙げられている昨今、保育者養成校にとっても非常に重要な意味を持つと考えています。また、幼少期の原体験は、その後のシビックプライドにも影響をもたらすと言われています。地域の自然を活かした保育実践が地方の魅力や活力の一助になることを期待しています。



写真1. 高柴山登山の様子



写真2. クラフト活動の様子



写真3. 4. 三春の里公園での秘密基地づくりの様子

2020年度 日本野外教育学会 オンライン研究大会 速報

オンライン研究大会実行委員：瀧 直也（信州大学）

日本野外教育学会オンライン研究大会が2020年11月7日～8日で開催されました。日本野外教育学会第23回大会の現地開催が中止される中、この研究大会は今年度における会員の研究発表・討議の場を確保することを目的に、日本野外教育学会として初めてオンラインで開催されたものです。

一日目は午後から、企画委員会シンポジウムと情報交換会が、二日目は自主企画イベントと研究発表・実践報告がオンラインツールのzoomとRemoを用いて行われ、各シンポジウムの登壇者も含め約100名の方が参加しました。

企画委員会シンポジウムに先立ち行われた開会式では、永吉会長に移動中の新幹線の車内からご挨拶をいただき、オンライン開催ならではの幕開けとなりました。

企画委員会シンポジウムでは、「新たな生活様式における野外教育の実践～苦肉の策から見いだせた光～」のテーマで、3つの立場から6名の方にコロナ禍での実践を報告していただきました。①大学・学校の取組では、高荷英久氏（日本体育大学）、西垣幸造氏（尼崎市立美方高原自然の家「とちのき村」）に、②青少年教育施設の取組では、高瀬宏樹氏（国立曽爾青少年自然の家）、勢力清美氏（京都ユースホステル協会）に、③民間団体では、井上達也氏（BSC ウォータースポーツセンター）、斎藤泰幸氏（湘南自然学校）にご報告いただきました。ご報告いただいた内容を受け、①大学・学校、②青少年教育施設、③民間団体の三つの分科会に分かれ、情報交換と今後の課題について討議が行われました。その後、再度全体で集まり、それぞれの分科会での内容を共有しました。各分科会で出された課題への回答と感染症対策について、医師である三浦裕氏（至学館大学）よりコメントをいただきました。三浦氏のお話の中では、感染ルートを理解することで対策は十分可能であり、換気と食事に気をつければ新型コロナウイルスは怖いものではなく、野外での活動は問題なく行えるといった、力強いメッセージをいただくことができました。また、

感染しやすい身体の部位やワクチンの効果についてもご説明があり、一般的な認識とは異なる専門的な見解を伺える貴重な機会となりました。

Remo 上で行われた情報交換会では、第23回大会の実行委員長の甲斐知彦先生（関西学院大学）よりご挨拶をいただき、関西学院大学で実施が叶わず非常に残念な気持ちであること、第23回大会でご登壇いただく予定であった講師の先生方からのメッセージが大会抄録に掲載されていることをご紹介いただきました。続いて、次年度の第24回大会実行委員長の多田聡先生（明治大学）より次大会へ向けての見通しを含めご挨拶がありました。Remo では6人掛けのテーブルが複数あり、実際の情報交換会のようにテーブルを移動しながら活発な情報交換が行われていました。

二日目の8日（日）は、朝から自主企画イベントが行われました。「特別な支援や配慮を必要とする人たちを対象とした自然体験活動の実践」「北欧の自然と野外でのライフスタイル」「続・野外教育学を体系化する試み」といったテーマが並び、どれも興味深い内容で活発な議論が展開されていました。

昼前からは研究発表のセッションが実施され、研究発表・実践報告①（Remo）では7題、研究発表・実践報告②（zoom）では10題の発表が行われました。コロナ禍での取組が多く、これからの新たな生活様式の中で実践及び研究を行っていくヒントを得ることができました。

本大会は、開催決定から短期間かつ少人数で準備を進めてきました。初のオンライン開催ということもあり、不手際な面も多々あったかと思いますが、企画委員会の皆さま、自主企画イベントの企画者、発表者、ご参加いただいた皆さまのおかげで、二日間のプログラムを終えることができました。この場を借りて、お礼申し上げます。

※オンライン研究大会の詳細は次号（3月号）で報告します。

第3回 日本野外教育学会 研究集会 開催のご案内

企画委員長 平田 裕一 (至学館大学)

企画委員会では2018年より、会員の皆さまの研究の発展に資するべく『日本野外教育学会研究集会』を開催してきました。これまで、「質的研究」について北村勝朗先生(日本大学理工学部)から、「実験的研究」について國部雅大先生(筑波大学体育系)から、「メタ分析」について小塩真司先生(早稲田大学文化構想学部)から、また「スポーツマネジメント」について松岡宏高先生(早稲田大学スポーツ科学部)から、それぞれ貴重かつ豊富な示唆をいただきました。また実行委員からは「科研費セミナー」や「研究に関する意見交換会」を開催し、会員間の研究に関するディスカッションの場としてきました。2020年度も同様の主旨の元、下記の日時・プログラムにて開催を予定しております。なお、参加申込は12月中旬に送信予定のメールおよび学会ホームページからの受付を予定しています。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

【日程】

2021年1月24日(日)

【方法】

zoomを用いたオンラインによる

【プログラム】

09:50 開会

10:00 「野外教育研究への示唆 スポーツ哲学の観点から」

講師：高橋 徹 先生(岡山大学大学院教育学研究科)

坂本 拓弥 先生(筑波大学体育系)

最近のスポーツ哲学の研究動向や、野外教育における身体性、スポーツ哲学と野外教育の親和性、などをキーワードにご講演いただきます。また講師の先生方から野外教育学会への投げかけ(問題提起)をしていただいたり、参加者からの質疑に回答いただくなど、ディスカッションの時間もあります。

12:00 昼休み

13:00 「査読・投稿を考える」

編集委員長千足耕一先生はじめ複数の査読経験者から、近年の投稿・受理の状況、投稿から受理までの査読手続き、また査読者の査読観点などを紹介いただきながら投稿また掲載論文の質量向上につながるディスカッションとなれば幸いです。

15:00 閉会

【参加費】

一般会員 3,000円 学生会員 1,000円

【問い合わせ】

企画委員会内研究集会実行委員 張本 文昭(沖縄県立芸術大学) harimoto@southernx.ne.jp



日本野外教育学会